

世界遺産バーミヤーンと世界遺産候補ズバラの保護と活用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23964

世界遺産バーミヤーンと 世界遺産候補ズバラの保護と活用

佐々木達夫（金沢大学）・佐々木花江（金沢大学）

1. バーミヤーン

バーミヤーンはアフガニスタンを代表する仏教文化遺跡の世界文化遺産であり、ガンダーラから中央アジアへ仏教が伝わった仏教の歴史を知るうえでも評価されている。崖面に彫られた大仏や数多くの石窟、石窟内壁に描かれた仏画など、貴重な遺跡がバーミヤーン河谷のあちこちに残る。その多くは壊れ消滅しつつある。2003年、世界遺産に選ばれた理由に、2001年の大仏爆破と自然を含めた景観の保存がある。現在の景観は過去の人々の日常の営みで作られた自然と人々の織りなす歴史である。丘上に築かれた二つの都市遺跡、シャハリ・ゾハックは7～9世紀の、シャハリ・ゴルゴラは13世紀初まで続いたイスラーム都市として知られ、バーミヤーンの世界遺産の重要な要素の一つである。緑の木一本もない土色の独立した小丘で、遠くからも見え目立つ。仏教石窟と丘上のイスラーム都市、他に例をみない類い希な景観、それがバーミヤーンの魅力と言われる。しかし、この30年間の戦いで遺跡の周辺や内部に地雷が埋められ、遺跡保護活動や考古学調査のために遺跡を訪ねることができなかった。

ユネスコは日本の資金援助などで遺跡を保護整備し観光に活用できるよう、ゾハックとゴルゴラを中心に2008年から地雷撤去を開始し、2009年9月21日、大仏周辺も含めて、バーミヤーン地雷撤去が完了した。その作業中に、遺物の発見が相次ぎ、それらは元位置で保存できない場合は地点を記録し、出土状態の写真を撮って採集するという計画が立てられた。

私たちはユネスコのコンサルタントとして、地雷撤去にともなう遺物の取り上げ方法を考え、倉庫と棚を作り採集品を保管し、それらを種類や産地で分類し、カタログを作り、その過程でアフガニスタンの研究者を養成し、将来の博物館に出土品を展示活用する目的で、2009年9月バーミヤーンを訪問した。出土品の整理分類と研究は私たちにとって日常生活である。地雷を撤去したため、今まで盗掘者も少なく観光客はいなかった遺跡に多くの人が入ることになる。地雷を撤去することは必用である。その結果、観光客の他に、

物を掘り出し骨董品として売る人が遺跡を破壊する恐れもある。観光客のための遺跡内散策路の整備、壊れた建造物の見学のための修復、遺跡周辺に住む人々との協議、地元政府やアフガニスタン国家、ユネスコなど国際的なグループとの共同作業が求められている。遺跡整備はまだ進んでいないが、援助金やアフガニスタン政府、ユネスコなどで多くの団体が設置され、必ずしも成果を挙げる仕事はしていないが、そこで給料をもらい役人や研究者が生活できるようになった。地域住民は直接に関わらないが、現地で雇われる仕事が増え、政府援助ばかりでなく観光客の落とす金など、間接的に住民の収入も増えている。我々の泊まったホテルでも門番や庭仕事、建物メンテナンス、レストランの仕事、部屋掃除や洗濯など、数十人が働いている。農業で人々は生きられるが、観光は現金収入のある仕事を生む。地雷を取り除いた後に発生する問題を一つずつ協議し解決しながら、遺跡の保存と観光資源としての活用、それに伴う住民の生活向上を進めることがユネスコや政府レベルで協議されている。

2. カブルと博物館

ドバイからカブルに飛んだが、その便のドバイ空港待合室は異様な雰囲気漂っていた。他の待合室は観光客やビジネス客、女性、子供をつれた家族連れで混雑し、笑い声や騒々しい活気にあふれている。しかし、カブル行きの待合室は静かで動きがない。頑強な男性が多く、口を一文字に引き締めている。私たちのアフガニスタン入国は、断食月ラマダンが明けて祝日のイードに入った9月21日だった。カブル市内はコンクリート壁と銃を抱える軍人の姿も目に付くが、一般



1. カブル国立博物館

の人々の日常的な生活が当然ながら見られた。どんな場所でもそこに適応した人々の生活がある。私たちは高く厚い塀で囲われたホテルに入るのに、ホテル敷地内のいくつかの門を通り、国連車も当然ボンネット内や車体下の検査を受けた。2年前にカブルを訪れたときは、国連宿舎と空港の間を国連車で移動しただけで、街中は歩かなかった。しかし今回、ユネスコ事務所はアフガニスタン国立博物館見学を勧めてくれた。破壊された博物館の周辺は緑の木々と草花で整備され、出迎えた館長は日本の援助を感謝していた。館内は閑散としていたが、日本がODAで援助した陳列ケースの「日の丸」のみが目立ち、展示品は少なく質も低かった。

1973年3月に博物館で見た展示品は盗まれ破壊されたものがあり、博物館が受けた政治的混乱は悲惨だった。いま、価値が高いと判断された資料は修復されて倉庫に保管され、展示していない。展示すれば、いくら厳重に警備しても盗賊団と銃の撃ち合いで警備員が殺され、骨董市場で高い値が付くものは盗まれる。

外国にあるアフガニスタンのいわゆる財宝も、いま博物館に返却すれば盗まれるだろう。出土したアフガニスタンに返し現地で展示するのは望ましいが、今は状況がそれを許さない。現状では軍隊に守られた安全な場所に保管し、見せないのが良いと博物館は判断している。

10月11日、我々は真っ青に晴れたパーミヤーンからカブルに戻った。その日、日本の外務大臣がカブルに到着し、夜にはパキスタンに移動した。カブル国際空港は昨年、日本の援助で作られた。8月20日に投票された大統領も50日経ってもまだ決まらない。民族対立や政権の汚職などの不正をみなが口にする。日本の援助も末端までは届かずにいる。しかし、10年前はアフガニスタン西部の古都ヘラートからカブルまで10日かかった陸路移動も、道路整備によって1日で走れるようになった。人々の生活も確実に向上している。

3. パーミヤーンの谷

9月22日カブルからプロペラの国連機でパーミヤーンに飛ぶ。土色の木々もない山々の頂には雪が残り、雪解け水の流れる谷には緑の畑が細長く伸びる。谷の耕地では小麦の刈り取りが終わり、脱穀し、藁を積み上げ、刻んで袋に入れる作業をしている。ジャガイモ

の黄ばんだ緑葉が広がる畑のあちこちで、いま掘り起こしたジャガイモを袋に詰めている。牛や山羊を追う子供たち。当たり前のように聞こえるかもしれないが、女の子も学校に行く。一般には学校は男の子だけが行くのが普通だ。近くのバザールを歩く。いくつかの道路は日本の援助で舗装され、店先の人々の表情も穏やかで明るい。笑顔で挨拶する顔見知りもいた。ホテル室内の机に衛星通信を利用したインターネットを接続し、机の前の大きな窓から大仏と石窟を一望しながら研究を開始する。発電機を止める夜はパーミヤーンに電気の明かりはなく、満天の星空とその下にほの白く浮かび上がる石窟の崖面が幻想的に見える。

ユネスコは数多くの会議を開催し、保存や活用の計画を報道でも知らせているが、地元の農民たちは日々の生活に追われ、それをほとんど知らない。周知する会を開くと、日本を含めた世界のいたるところで同じ質問が繰り返される。「今私たちは生きるか死ぬかという生活をしている。遺跡を保存するために多額の費用を使うなら、それを食料費にまわしてくれ。食料・生活が先で文化は後だ。景観保存といって、我々の生活を電気もない車もない牛やロバを使う昔のままの土埃のなかに生活にとどめろというのか。」というような低いレベルの質問が多いという。日本でも政治家は経済回復が優先と言う。大阪でもまず博物館など文化施設を廃止しようという話が出たのは有名である。単純な日々の生活を送り、崖面の壊れた大仏も気にかけることなく、ユネスコが保存事業をするなら賛成するという人もいる。ユネスコ職員はユネスコが事業をするのではなく、地元民と地元政府や団体が保存するのだという。しかし、資金と情報をもつのはユネスコで



2. 石窟内の部屋

あり、ユネスコに寄付するのは国際情勢に敏感な国の利益を考える外務省である。資金援助で日本の果たしている役割は大きい。

一つに絶対的な価値をおき、多面性のあるものを一面のみで判断するのは、多くの問題を引き起こす要因である。餌のみあれば、犬や猫のような格好で食べて腹がふくれれば、生活文化や歴史環境を破壊しても良いのか。各地域で発展した地域文化や歴史文化を伝える環境や感動を与える景観のなかで楽しみながら生活することは素晴らしい。生活第一というより、生活の質を選ぼうという豊かな社会が生んだ考えである。

9月26日、いくつかの集まりがあった。午前「世界遺産バーミヤーンの保存と観光開発」ワークショップは、バーミヤーン市長やアフガニスタン文化副大臣などが挨拶し、ユネスコのパリ代表、ユネスコ・カブール代表などが世界遺産に登録されることで遺跡が保護されること、遺跡の観光利用で住民生活が向上することなどを説明した。地元住民からはドバイのように開発されるのを望まないという意見も出た。それに対し、世界に誇る素晴らしい遺跡を保護し活用することで、観光客が来て住民の収入が増加し生活が向上する都市開発も遺跡保護と同時にできること、世界遺産のなかに住む喜びなどが説明された。仏教徒の石窟や大仏の重要性のみを訴えるのではなく、イスラーム教徒の作り上げた現在の歴史と景観を観光に利用することが強調されている。

午後、シャハリ・ゴルゴラで「地雷撤去完了記念行事」が開催され、関連機関からの挨拶があり、日本大使館の児玉光也さんも多額援助する日本の活動を説明した。夜はカルチャーナイトで地元の产品销售、音楽とダンスの披露があった。いずれも最近復活させた地域文化である。27日、28日もユネスコと地元政府が住民と協議する会議が続いた。その他にも同じホテルに泊まるいくつかの団体がワークショップを開いて、バーミヤーンの文化や社会開発や教育などを話し合っているらしい。彼らは山に登り、バンダミールという石灰で段々になった青い湖に行き、石窟や仏陀跡を見学して満足している。街中には日本の援助で作った汲み上げ式の井戸が壊れているのも目立つ。自分たちで直さず、修理の資金も援助で欲しいという人たち。与えればさらに多くを望む人たち。日本と同じレベルの生活になるまで援助することが必用か。多額を援助す

る日本の一人として眉をひそめることもある。その場の資金援助は必要だが中長期的にみれば、教育が大事である。自ら地元の生活向上をする若者を育てることが大事だ。しかし、教育を受けると地元に戻る人は少なく、多くは都会か外国に行って多くの金を稼ぐ。

私たちは大仏前の倉庫に置かれたゴルゴラとゾハック



3. ゴルゴラの地雷撤去完了記念式典



4. ゾハックの岩



5. ゴルゴラの丘

クの採集品の整理を10月11日まで続けた。倉庫のある建物にはあちこちに人がいる。守衛の兵士たちは終日部屋のなかで座っておしゃべり。門番はたまに人が来ると門を開ける。こうした人たちが一つの建物に十数人いる。世界遺産で生まれた団体の職員もたまに部屋に来るとおしゃべり。なにも仕事をしていないように見える。こうした人々の他には土地に根ざして畑仕事をする人たちがいる。ホテルの机に向かい、窓の外を見ながら実測や撮影をする。窓外の世界はテレビをみているような感じがする。農民が収穫し、人々がバザールから家に戻り、子供は学校から家路に着く。人々の一日の生活が目の前で展開していく。毎日繰り返される同じ営み。パーミヤーンを去るころ、ポプラ並木は黄色に染まり、朝夕はストーブを焚く寒さになっていた。ゴルゴラの丘は石川県の白山と同じ2,700 m。ある朝、霜がおり、ホテルの日陰では氷が張った。もうすぐ雪が降る。

4. 遺跡採集品の整理

地雷撤去に伴う考古学遺物の採集も当初の私たちの目的であった。アフガニスタン大統領が選挙後も決まらず、日本外務省がアフガニスタン全土を退避勧告地域としたこともあり、私たちもパーミヤーン行きをキャンセルしたが、カブル滞在のユネスコ職員の勧めで行くことにした。パーミヤーン行きを話すと、危なくないですかと言われるが、危ないでしょうと答える。道路は人をひき殺す車が走るから、渡らないか、気をつけて渡るかの選択だ。東京は地方から行くと交通事故が多く危険地帯ということになる。それでも行きますかという問いに気をつけますと答える。昨年から続けられ、年内いっぱいかかると予想された地雷撤去が今年5ヶ月間で9月21日に完了したため、私たちは地雷撤去に直接関わることはなく、集められた数トンの陶磁器を整理する作業から入った。

地雷撤去はいくつかのチームが並んで丘上に歩いていく方法をとった。グループが歩いて登る範囲をlineと呼ぶが、それはある程度の範囲を指す。金属探知機で調べられる距離は20cmまでらしく、50cmほどの深



6. ゴルゴラ出土の施釉陶器

さで建築遺構の室内はほとんど掘り、掘った土はすぐ隣に移動させる。ある人は2mも掘った部分があるという。これでは遺構床面とその下部は完全に破壊されたことになる。泥レンガ壁や天井が崩落して床面上に堆積している部分は50cm前後ある部分もあるが、現状では地表面に耕作したように掘った部分と移動した土が直線的に並ぶ。どこまで掘ったか、床面が破壊されているのか、それを確認する作業も数年後には非常に困難になる。発掘も難しさが増す。発見した地雷は掘りあげ採集する。移動が難しい地雷はその場で爆発させる。こうして多くの遺物が採集された。

倉庫で下の小川から汲んだ水でそうした土器を洗い、小袋に入れる。袋内に入れるデータは、チーム名 demining team (例えば DMT9, DT9, T9)、歩いたライン Line 名 (例えば Lin3, L3)、日付 (例えば 24.6.09) であり、地雷撤去後に歩いた際には GPS データを記載して採集している。遺物は表面採集と、地雷を発見するため、また地雷を掘り出した際に出土したものが混じる。地雷撤去チームの歩いたゾハックの場所はスケッチ記録がある。考古学的な資料価値は、遺跡名の他にはほとんど無い。しかし、小袋ごとに分けた陶磁器を種類ごとに小袋から取り出すという作業はできない。意味の少ないデータがカタログ作成作業の効率と成果を妨げている。しかし、現状を記録しカタログを作ることが今の作業である。結果としては遺跡単位でまとめて良い資料であるが、今はそうできないため、整理の作業効率が悪い。遺跡にグリッドの網をかけ、GPS を利用しながらグリッド名で採集するか、あるいは斜面西側・東側というように、北側斜面上方・南側斜面下方というように分けるのも、遺物整理では扱いやすかったと思う。泥レンガ建築内から採集したものについては、建物番号を付けるのも良かったと思う。層位的な記録はない。地雷撤去が目的であり、考古学調査はその後に行われるのだから、これらの遺物が集められ、遺跡名がわかるだけでも現段階では貴重なものといえる。発掘や修復前に遺跡の平面図を作成することが必要である。

地雷撤去チームとカブルの考古学研究所から来たアフガニスタン考古学者と一緒に歩いて、考古学的な記録を付けて陶磁器などを採集した。私たちが現地滞り、その整理はフランス人大学院生が継続しており、我々に採集品の保管場所や状態を説明してく

れた。彼も正確な情報を聞いておらず、それぞれの団体の連携と情報交換はきわめて貧弱だった。もともとの確かな情報はないのかもしれない。集められた陶磁器は黄白色粉のような土が付いて表面が見えない。川の水を汲んで洗い、乾す。ビニール袋に入れるが、尖った破片ですぐに破れる。日本からプラスチック箱を運ぶ予定だったが、輸送費が購入費の2～3倍もかかり、トラックでパキスタンからアフガニスタンを移動して盗まれずに到着するとは思えないという。バザールでいくつかメタル箱を買ったが、ドバイかシャルジャでプラスチック箱を購入し、国連機で運ぶのが安く安全だということになった。大仏の隣の石窟にまだ住んでいる人にバザールで買った布と糸を渡し、出土品を入れる大小の袋を縫ってもらった。石窟内は温度が一定し快適だが、トイレなどは崖の外になる。

5. シャハリ・ゾハックの陶器

英語では Shahr-i Zohak という名称を用いるが、その他にもいくつかの表記法があり、発音はシャリゾハックと聞こえる。大部分は釉のない土器である。クシャーン朝時代の土器があると言うが、遺跡の主要年代が7～9世紀と推定されている。バミヤーンでもっとも古い施釉陶器は10世紀からと推定されるが、ゾハックでは赤色磨研土器が多く見られ、褐色の鉄分の多い泥で文様を描くものが量は少ないがある。10世紀前後の施釉陶器は見られない。その後の時代の施釉陶器はほんの僅かの点数である。いずれも一片だがバミヤーンの緑釉陶器碗、多彩釉刻線文陶器碗、15世紀イラン製染付皿、18世紀イラン染付皿、20世紀中国染付碗が見られた。いずれの時代も人はいたが、砦あるいは拠点遺跡としての時代は10世紀より古い時代である。

ゾハックの研究書には次の本がある。

Baker, P.H.B. and Allchin, F.R., 1991, *Shahr-i Zohak and the History of the Bamiyan Valley Afghanistan*, BAR International Series 570.

6. シャハリ・ゴルゴラの陶器

英語では Shahr-i Gholgolah という名称を用いるが、その他にもいくつかの表記法があり、発音はシャリゴルゴラと聞こえる。丘の斜面全面に泥レンガ建築の痕跡が残り、丘上部にも泥レンガ建築跡が残る。採集した陶磁器の大部分はバミヤーン谷の発掘品から、

12世紀から13世紀初と分類したもので(佐々木 他 2008)、大部分がバーミヤーンで作られたものである。その後の時代の施釉陶器はきわめて少なく、ゴルゴラは12世紀の都市遺跡であり、10-11世紀には斜面下方の石窟に住む人はいたが、まだ丘上の都市とは言えなかった。それ以前は丘下の石窟に人が住むことはあったが、それも規模の小さなものだったと思う。

バーミヤーンの仏教文化が栄えた6~8世紀頃はバーミヤーン谷を少し下ったゾハックが同時代の交通の要所の砦であり、9~10世紀に仏教の衰退とバーミヤーンのイスラーム化時代にゾハックは廃墟となる。11世紀にゴルゴラの丘斜面に家がまばらに建ち始めたようだが、12世紀に入ってゴルゴラは丘斜面の全面に家が建ち並ぶ都市となり、13世紀初に廃墟となった。こうしたことが出土した陶磁器から窺える。ゴルゴラの遺跡整備は丘下と斜面では少し異なり、都市遺跡としての保存整備事業は13世紀初に限っても良いことがわかる。

バーミヤーン及びゴルゴラの陶器については次の論文がある。

佐々木達夫, 佐々木花江, 野上建紀, 2008「バーミヤーン出土のイスラーム陶器」『金沢大学考古学紀要』29:1-30.
Gardin, J.C., 1957, *Poteries de Bamiyan*, *Ars Orientalis* 2:227-245.

7. バーミヤーン遺跡

バーミヤーンは素晴らしい遺跡である。訪れる人々は感動を語る。それでも観光地としての整備はまったく進んでいない。住民も水道がない泥壁の家に住み、トイレも家壁外に垂れ流す生活をしている。観光客が訪れる大仏や石窟付近には土産物屋やトイレもない。買い物ツアーは町の市場に行き、レストランは郊外のホテルに行けば良いというのが現状に合った考えである。遺跡保護が優先だが、そのためには住民生活向上のための開発を行うことが検討されている。以前は開発からいかにして遺跡の破壊を護るかに焦点が当てられていた。開発は遺跡を壊し、観光は壊れやすい遺跡を消し去る行為だった。バーミヤーンの場合は、保存するために規制した開発をし、遺跡を観光に利用することをユネスコ等が考えている。

壊れかけた土の遺跡はさらに壊れる。どんなに保存修復をしてもあと数十年もつとは思えない。壊れ消え

ゆく遺跡の燃え尽きる最後の輝きを見ているように感じる。遺跡とはなんだろう、保存とは修復とは、世界遺産とは、豊かさと観光とは、と考えさせる典型的な例の一つである。

8. ズバラ遺跡

バーミヤーンから帰った翌月、ペルシア湾の港湾都市ズバラ遺跡にいった。世界遺産に登録するための考古学調査が始まり、その状況を見に行った。カタール半島の最大の遺跡である。ズバラ遺跡はカタールの近代都市遺跡で、首都ドーハの北北西120kmの西側海岸に位置する。東海岸のドーハから車で1時間20分ほど半島を斜めに横断して行く。遺跡に隣接して、1938年に沿岸警備のために建てた砦があり、方形に周囲を巡る壁の四隅には円形塔3つ、方形塔1つが建つ。1987年に改修されて博物館となる。館内の壁内側に小部屋が作られ、その内側は中庭となる。塔内は1階と2階に別れ、1階の天井は2階の床となり、小さな出入口が塔内にある。周壁に沿う部屋の天井は砦壁に沿う床となる。海岸に近い近代都市ズバラの発掘品が僅かに展示され、2009年発掘の写真が少し展示されている。

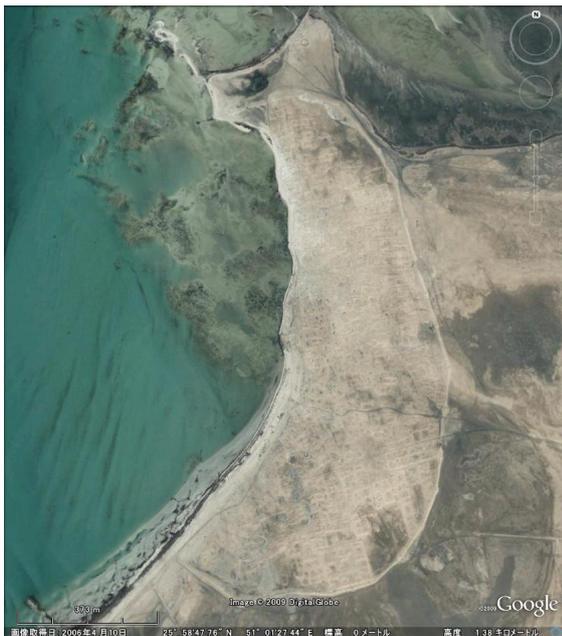
ズバラ遺跡は、その外側周囲を細かな貝殻混じりの石(ビーチストーン)を積んだ壁(外側壁)で囲まれる。長く延びる壁には連続的に円形の見張り塔が作られる。1765年頃に病気が蔓延したクェートやバスラから移住した商人たちによって新たな貿易港として建設され、バハレンとの領土争いにより1937年に廃墟になったと言われる。アラビア湾(ペルシア湾)の中央部に位置するため、貿易中継地として有利な場所で、真珠取引の港湾都市として知られる。都市の周囲を囲む外側壁があり、その内側となる住居の中にも壁がある。内側壁は住居の上に築かれるため、初めに都市を囲む外側壁が作られ、後に内側壁が作られたことがわかる。外側壁が都市を防御する壁である。壁の内側区に住居が建てられ、その住居の痕跡が今も残る。一部の住居壁には漆喰が塗られた痕跡が残り、壁はBeach Stoneを積み上げている。細い道路と建て込んだ家並みのイスラーム港湾都市の形態を残している。遺跡表面は細かな砂で覆われ、表面を覆う表土には遺物がほとんど見えない。発掘すると多量の遺物が出土する。我々が歩いた遺跡の表面に土器片、中国磁器コーヒークップ、褐釉陶器、クロム青磁などが見られた。外側壁の周囲



7. カタール半島の北西海岸にズバラ遺跡



9. ズバラ遺跡の住居群跡



8. ズバラ港湾都市遺跡



10. ズバラ遺跡の住居跡



11. ズバラ遺跡の外壁と塔

には多数の墓や、大きな石積み井戸が見られる。海岸には浅瀬の部分に自然の岩があるが、南側のみ砂浜となって船着き場に利用されたと思われる。

1929年にアメリカで起こった大恐慌は、翌年1830年の真珠相場の大暴落を引き起こし、ズバラの貿易港としての繁栄に打撃を与えた。サーニ家は真珠以外の安定的な財政基盤の確立を目指す方針を打ち出し、ズバラが廃墟となってから、そこに住んでいた人々に



12. ズバラの砦

よって、ドーハに新たな都市が築かれた。

9. ズバラ遺跡の調査と観光

カタール政府はズバラ遺跡を世界遺産候補として申請し、書類不備として2004年に審議対象外となったが、2008年に暫定リストに記載された。カタール政府は2008年からコペンハーゲン大学考古学のインゴルフ・ツイッセン教授と共同プロジェクトとしてズバラ遺跡発掘を開始し、遺跡整備事業を進めている。2009年11月に我々が遺跡を訪れたとき、20人ほどが発掘調査を始めていた。彼らは遺跡に建てた家に住む。トイレも水洗でシャワーもある。作業員の手配が遅れ、まだいなかったが、ドーハから毎日車で通う予定という。いずれテント村ができ、作業員もここに半年住むことになるだろう。発掘に参加している人々は75%がイギリス人です。すでに中近東で発掘に参加していた人々が多く、通常はロンドンなどで緊急発掘に従事していた。コペンハーゲン大学と契約しているが、冬の半年間の発掘であり、大学は学期中で学生の参加は難しく、考古学の発掘専門家が有給で雇われている。英国人の他にデンマーク、ニュージーランド、ドイツ、ポーランド人がいた。26歳以上の考古学発掘専門家が参加条件であり、学生はいないため、精度の高い発掘調査が行われると言う。

カタール半島は以前、温暖な気候であったため、石器時代から人々が住んでいた。この地域が乾燥化し砂漠となった紀元前4千年紀からは、人々の居住の痕跡はきわめて少ない。ポルトガルはペルシア湾岸の各地に砦を建設したが、カタールには存在しない。当時は支配する地域としての魅力がない荒地が広がって

たとも想像される。18世紀にカタールを支配したサーニ家 Al-Thani は、真珠採取とその取引を支配し、100年後にはカタールの統治者になる。ズバラ Zubara の支配者はハリファ家 Al-Khalifa であったが、隣国バーレーンの統治者となり、両家は対立することが多かった。サウジアラビアとバハレンを結ぶコーズウェイがカタールまで延びるため、ズバラ遺跡の周辺の遺跡調査も併せて行われている。ズバラと同年代の陶磁器が採集される遺跡も近辺に点在していることが判明している。

アフガニスタンと比べ、カタールは石油や天然ガスが豊富で豊かな国である。各国から援助をもらわず、ヨーロッパ人たちを自前で雇って調査と遺跡保護を行っている。遺跡の周辺に住民は住んでいない。遺跡が破壊される危険はないが、カタール政府は観光目的で遺跡保護と周辺の開発を計画している。壊れるから保護するのではなく、利用するために開発的修復をしている。遊園地建設に近い発想である。ズバラ遺跡も世界遺産、観光、遺跡保護の関係が大きく変化している様相がわかる典型例の一つである。

(e-mail: tatsuosasaki@hotmail.com ;

hanaesa@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)

金沢大学・台湾大学 研究交流講演会

日時：1月7日（木）13:00～16:30

場所：金沢大学 中央図書館 AV 室

受講料：無料

謝 明良（国立台湾大学考古学教授）「葉文皿について - 台湾高雄県左營清代鳳山県旧城聚落遺跡出土の青花葉文皿を中心として -」

坂井 隆（国立台湾大学考古学教授）「世界文化遺産の問題点 - 東南アジアを中心に -」

STOLYAROVA Nina ストリアロワ ニーナ（金沢大学大学院人間社会環境研究科客員研究員・元タシケント国立総合大学考古学教授）、SMAGULOV Erubulat（カザフスタン国立考古学研究所・サウラン市遺跡発掘調査隊長）“New Investigation and discoveries at Sauran city in South Kazakhstan”

田辺勝美（中央大学教授・元金沢大学考古学教授）「アフガニスタン北部出土の二仏並存図について」